令和四年度卒業式　式　　辞

桜もほころび始めた今日の良き日に、このように厳かに令和四年度滋賀大学卒業証書・学位記及び大学院研究科学位記並びに特別支援教育専攻科修了証書授与式を挙行できますことは、滋賀大学にとって、この上ない喜びであります。

教育学部二百三十三名の卒業生の皆さん、および大学院教育学研究科修士課程八名、大学院教育学研究科高度教職実践専攻二十名、並びに特別支援教育専攻科九名の修了生の皆さん、本日は誠におめでとうございます。入学、進学以来、また日本への留学を志して以来、今日に至るまで、とりわけ新型コロナウイルス感染症の中で、日々努力し充実した大学生活を送ってきた皆さんに心よりのお祝いを申し上げます。またそれぞれの学生を支えてこられた保護者やご家族、ご友人、関係の方々に対しまして、その力強いご支援とご助力に敬意を表しますと共に、厚く御礼申し上げます。

学部を卒業する皆さんは、四年前に大きな夢を持ってこの滋賀大学に入学し、大学生活の中で大きく成長されたことと思います。今から三年前、皆さんが一年目を終えようとしていた二〇二〇年の一月に、新型コロナウイルス感染症が突如として広がりはじめ、その後今日までの三年間、皆さんの生活はコロナ禍との闘いであったと思います。また二年前に修士課程に入学された皆さんは、新型コロナウイルス感染症の広がりの中での大学院入学となりました。三年前の感染当初はウイルスについて多くの情報が得られておらず、非常に慎重な対応をせざるを得ない状況で、卒業式も入学式も中止となりました。キャンパスへの学生の立ち入りも制限されました。その秋には、いったん小康状態となりましたが、二年前の春には変異株であるデルタ株が流行しました。その後ワクチン接種が進み感染者が減りましたが、昨年の冬に次の変異株であるオミクロン株が出現して再度感染が拡大しました。このように状況がめまぐるしく変化しました。

ただしオミクロン株の重症化率は低く、感染対策をおこないながらも入構制限などの強い制限措置はとられず、最後の学年である今年度は、皆さんもある程度コロナ以前のような大学生活が送れたのではないかと思います。また、皆さんの中で実際に感染した方もいると思いますが、無事に回復されたことと思います。

このように、新型コロナウイルス感染症対策のため、友達同士の交流の場や、クラブ活動なども制限せざるを得ず、皆さんが本来の大学生活あるいは大学院生活が送れなかったこと、そして大学側もその持っているすべての可能性を皆さんに提供できなかったことは、大変に残念なことです。

しかし残念なことばかりではありません。コロナ禍という困難を乗り越えて皆さんは成長してきました。そして、人類にとって未曾有ともいえる危難に対して、ワクチンや治療薬も迅速に開発され、ようやく新型コロナと共存する見通しが見えてきました。現在、社会全体でデジタルトランスフォーメーションの重要性が強調されていますが、コロナ禍によってデジタルトランスフォーメーションが一気に加速しました。皆さんはそれまでなかったオンラインの授業を経験しました。皆さんがこれから進んでいこうとしている社会では、コロナ禍を越えて新しい地平を切り開くことが求められています。皆さんの若さと創造性が求められているのです。

ここで、創造性について少しお話してみたいと思います。実は創造性は何もないところから生じるものではありません。まずは先人の蓄積してきた知恵を学び吸収したうえで、創造性が生まれてくるのです。剣道や茶道では、守る、破る、離れる、と言われることがあります。音読みをすると、守るは守備の「しゅ」、破るは破壊の「は」、離れるは離脱の「り」ですので、「しゅはり」となります。「守」(守る)は先生や流派の教え、型、技を忠実に守り、

身につける段階と言われます。次に「破」(破る)は、他の流派からも良いものを取り入れ、型を変える段階です。最後の「離」(離れる)は自由に独自の新しい型を生み出す段階です。「離」が創造性を表していますが、それまでに守る、破る、の段階があるというわけです。皆さんの多くは社会に出て仕事をすると思いますが、まずは先輩や上司から仕事のやり方を教えてもらう段階があります。これが「守」です。仕事に十分慣れて先輩と同様の仕事ができるようになったら、自分の工夫をいれて仕事のやり方を変えてみる、改善してみる、という段階になります。これが「破」です。最後にそれまでとは違う仕事のやり方を提案できる「離」の段階があります。コロナ禍のような急激な社会の変化の中では創造性が求められていますが、創造性を発揮するには、それまでの蓄積も重要です。滋賀大学で皆さんが学んだことは、皆さんが創造性を発揮する際の基礎となるものです。

もう一つお話したいのは、生涯教育の重要性です。社会は今後も急激な変化をとげると思います。現在は寿命も延び、人生百年時代と言われています。滋賀大学で皆さんが学んだ知識や学力は、皆さんの基礎となるものですが、社会の変化とともに常に学びなおす姿勢を持つ必要があると思います。最近ではリスキリングという言葉で、社会人の学びなおしの重要性が強調されています。滋賀大学では、社会人のリスキリングの機会も提供していきます。ぜひ、時々は滋賀大学に戻り、生涯学びなおす機会を作っていただきたいと思います。

皆さんの大学生活の中で、もう一つの大きな出来事は、昨年二月二十四日に始まったロシアによるウクライナの侵略でした。侵攻当初は数日でキーウが陥落するともいわれていましたが、ウクライナの粘り強い抵抗が続いており、この戦争は開始からすでに一年以上が経過しました。戦争な悲惨な状況は今でも毎日のように報道されており、一日も早く平和が回復されることを祈っています。ウクライナからは多く人が避難し不自由な生活を余儀なくされ、滋賀大学も三人のウクライナの学生を受け入れました。

日本に住んでいる私たちは、この世界は平和だと、何とはなしに考えていました。しかしロシアによるウクライナの侵略は、突然その平和な生活が失われ、恐怖と悲しみの中での生活を強いられることがあるのだ、ということを私達に示しました。私たちは、平和は与えられるものではなく、積極的に守っていかなければならないものであることを学びました。ウクライナの人々は、大きな犠牲を払いながらも、侵略と戦っています。ウクライナの人々にとっての平和とはどんな平和でしょうか。今日の式典にあたり、私達は平和について考え、ウクライナの戦争の終結とその後の平和を見届けたいと思います。

教育学部、研究科、そして専攻科の卒業生、修了生のみなさん。皆さんの多くは教員になり、または現場に復帰されることと思います。また教員ではなく、教育産業や教育以外の場に出ていかれる方もあるでしょう。皆さんに覚えていてほしいのは、みなさんが滋賀大で学んだ教育とは、人を創る、人を育てることだということです。社会が急激に変化する中、教育にも革新が必要です。その一方で人類が築いてきた伝統や知恵も、将来の世代に伝えていかなければなりません。教育が果たす大きな役割を忘れずに、社会に出てほしいと願っています。

新しい時代の最前線に立つ皆さん、本日は本当におめでとうございます。滋賀大学を卒業した諸先輩は、社会のあらゆる場面で活躍しています。今日卒業する皆さんの活躍の場は大きく開けていると思います。あらためて皆さんの新しい門出を祝福いたします。

令和五年三月二十四日

国立大学法人滋賀大学長　　竹村 彰通